

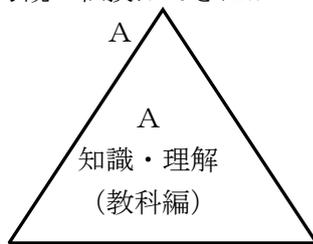
「授業備品」N028 H. 28. 12. 5「研究の下慣らし（校長会の講演資料）」（6県に配布中）

子供の未来保証となる「学力の向上」を図るために、常に指導方法を工夫してきたらどうか。常に自己反省をしてきたらどうか。自らを振り返るとよい。最近、熊本、福岡を歩いた。多くの教師の必死さが伝わってきた。研究が進み、学力が向上する予感がする。

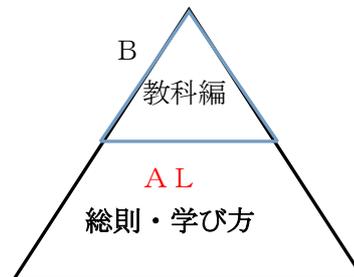
### 1 チーム学校

自分には自分流があると信じ込み何も変えない指導方法（教師主体の授業）を続けた教師、それで学力が向上したらどうか。今一度、自らを振り返るとよい。本年の全国学力・学習状況調査である県の3町は、数値にすばらしい伸びがあった。チーム学校の環境が整ったからだ。

### 2 学力観の転換はできたか



何を知っているか  
(教師がしゃべりまくる・受験型の授業)



何ができるか  
(問題解決型・子供主体の授業)

### 3 共通の指導観

かつて教師それぞれが自分の得意な教科を話し、他の教師がそれに口を挟めない状態があった。それが子供にはよい影響を与えなかった。教科は違っても、学び方の指導（学習指導要領の総則）は同じだ。だから、中央教育審議会で結論付けた次期学習指導要領「AL」を進め得ることが重要だ。そのための共通の指導観が重要だ。

- ①指導要領が変わることを認識する。受験知識中心の授業から、生きる上での問題解決的な授業に変える
- ②アクティブ・ラーニングを進めることを確認する
- ③子供が主体的な授業を（子供を前面に出す）行う。教師の説明型の授業（しゃべりまくる授業）は止める

### 4 指導方法の共有化（ユニバーサルデザイン）

それぞれの県の資料「授業づくりベーシックガイドブック」「授業スタンダード」を全教師が学び、それをもとに指導方法の共有化を図るとよい。

### 5 下慣らし

研究を内容のあるものにするための「有効な工夫」や「下慣らし」がある。

#### ① かつての勤務校の研究の経営方針

ア研究 DCAP サイクルを充実する イ授業の学び合い、言語活動、振り返りの3視点を大切にする ウ言語わざを習得させる エ振り返りを確実に記入させる オ共通理解型ではなく、研究を先行する教師の考えを共有する カ全員が年3～4回以上の研究授業を行う キ全員が研究課題レポート・参観者論文作成する

#### ② 校長は毎日5分間、授業参観を行う

校長自身が授業のわざを磨く、先輩としての助言をお行うために毎日、教室に5分間入る。悩んでいる教師には助言ができる。また、研究の進化を校長自身が見届けられる。学力の向上は授業にあり、5分間の授業参観が学力の伸びにつながる。

#### ③ 講師から学んだことを続ける

多くの時間と予算を使ってきた。確実に「完成形」に近づいているはずだ。そうなっていなければ、課題がある。研究に正対し、学んだことを毎日、実践してきたらどうか。保護者は、授業が変わったことに気付いている。

#### ④ 研究主任に合わせる

研究主任が周囲の教師に気を遣わず研究を進めているだろうか。気を遣っていたら研究は進まない。主任を支えるのは校長であり、リーダーだ。これまで「研究を先行している主任に合わせる」ことを教師に指導するとよい。主任は、自らの考えや国や県が示す文書を詳細に読みとり、考えを紙面に記したり口頭で助言をし力強く研究を進めて欲しい。

#### ⑤ 羅生門的な発想へ

先が見えないから研究には面白さがある。研究を行う前に「やる、やらない」の発言があることに危機感を持ってきた時期がある。経験したことだがそれが常態化していれば、研究は進まないばかりか、大きな成果は出ない。まずは、やるやらないの議論ではなく、「まずはやってみる」、羅生門的な発想に立つことだ。

